

# タカラダニについて伺います

一般財団法人 日本環境衛生センター 環境生物部 橋本 知幸

### 《質問》

PCO社員です。毎年、4月になると、一般住宅や工場などからのタカラダニの相談が増えます。相談は4~5月に集中し、他の時期にはなくなります。年間相談件数はゴキブリに次ぎます。ほとんどの場合、電話対応だけで済ませてしまうのですが、今はインターネットでいろいろ調べてから相談してくる人も多く、社員より詳しい方もいるようです。このタカラダニについて教えて下さい。

### 《回答》

春から初夏にかけて現れる「小さく赤い大発生するムシ」の相談は、インターネット上でも多くの方が投稿しています。そのムシの見られる場所やその数から、ほとんどのケースでカベアナタカラダニと推測されます。少し前まで成虫では区別が困難なハマベアナタカラダニとされていた種類です。分類学的にはタカラダニ科アナタカラダニ属です。東京周辺ではソメイヨシノの開花の頃から5月末までの約1月半くらい、雨以外の日に、特に家の外壁、ベランダ、道路、電柱、墓石などの人工物の表面を多数歩いているのが観察されます。そうした場所で放射温度計を使って表面温度を測定すると、春とは言え、40℃前後になっています。そのような輻射熱の影響もあって、他の生き物があまり見つからないため、本種の徘徊がひとときわ目立つこととなります。

日本ペストロジー学会では、このカベアナ

タカラダニの見つかった地域を都道府県単位で集計しています。まだ報告のない県もありますが、北海道から沖縄まで全国的に分布しているものと思われます。

タカラダニの仲間の多くは、幼虫がセミ、アブラムシ、バッタ、蛾、甲虫などの体表に寄生して体液を吸って、成虫になるとそれらの昆虫から離れて自由生活を送ります。しかし、カベアナタカラダニは昆虫に寄生した状態で見つかったことはなく、どの発育段階でも人工物の表面を徘徊し、コケや花粉などから採食していると考えられています。生態的にまだまだ不明な点が多く、成虫の大発生に先だって、本来、成虫よりも多く見られるはずの幼虫があまり見つからないこと、雄の成虫が見つかっていないことなども、今後の研究課題です。

### 《質問》

雄がいないのに、増えるのですか？

### 《回答》

雌だけで交尾せずに増殖できる仕組みを「単為生殖」と呼びます。アブラムシやハチなどにも見られ、雌親の遺伝子を子がそのまま引き継ぐものです。一般的には増殖能力が高いのですが、雄雌が世代ごとに遺伝子をブレンドする「両性生殖」と比べて遺伝的多様性が乏しいため、環境変化に弱いとされています。

ただ、雄が見つからないというのは、雄自

# タカラダニについて伺います

体が存在しないからと断言できるものではなく、もしかするとどこかに雄が存在していて、交尾・産卵するという両性生殖を行っているのかしれません。

## 《質問》

同じ時期に他の赤い虫がいるとのことですが、識別ポイントはどんな点ですか？

## 《回答》

この時期は本種以外にも赤いムシは何種類か現れます。例えば、セイタカアワダチソウヒゲナガアブラムシは赤い色合いが肉眼ではタカラダニと似ていますが、昆虫であるアブラムシでは長い触角があり、脚はタカラダニと異なって褐色～黒色です。またハダニ類はタカラダニと近縁のグループなので、さらに識別が難しく、顕微鏡が必要です。ハダニ類は同一種内でも体色の変異が大きく、ナミハダニやカンザワハダニはタカラダニ同様に真っ赤な系統も現れますが、緑、黄、オレンジ、赤、黒、白などの系統も出現します。カベアナタカラダニとの相違点は顕微鏡下で標本にして見ると、ハダニ類では脚や胴体部に長い毛が多数あるのが目立ちます。アブラムシもハダニも、群れで見つかることが多いですが、風に飛ばされて単独で徘徊していることもあります。

さらに、タカラダニ科の中にも多くの種類が含まれます。カベアナタカラダニの場合、胴体部背面前ほどにある単眼の斜め後方に「穴」があります。これが和名の由来にもなっている穴です。壁の割れ目などにも見られますが、「壁穴」を意味している訳ではありません。本種はこの穴が存在している上に、第1脚脛節が

先端部ではなく、中ほどで最も太くなること、前体部背面の肥厚部の前後に1対ずつ感覚毛があり、前の1対は後方のものより短いなどの特徴があります。発生地では普通、多数発生していますので、同定の際には1匹でなく、複数の個体を捕獲しておくといよいでしょう。

## 《質問》

人への健康被害はないと言われていますが、ときどき刺されたという話も聴きます。どのように対応すればよいのでしょうか？

## 《回答》

本種あるいは近縁種によって刺されたという報告が国内外でわずかにあります。タカラダニ類の口器は咀嚼(そしゃく)型ではなく、「吸汁タイプ」です。刺されるというのはある意味、理にかなっていません。植物寄生性のハダニ類でもヨーロッパで園芸従事者が刺される職業病が知られています。ですから刺されるというのは頭から否定はできません。私はこのダニを小さな容器に入れて腕に固定し、何度か観察したことがありますが、今まで刺されたり皮膚症状が出たことはありませんでした。恐らく、人に対する刺咬はかなり偶発的なものではないかと思います。皮膚症状がひどいようなら皮膚科での受診を勧めるべきでしょうが、そこまでひどい方に遭遇したことはありません。

一方、ダニがつぶれて真っ赤な体液で汚れることがありますが、これは不快感に属する被害でしょう。それ以外では工場の屋根などを徘徊している個体が、製品に混入するのを心配する声が寄せられますが、侵入経路は窓やドアなどを歩いて通過するのが主体で、人

や物に付いて室内に侵入するケースは少ないと考えられます。

### 《質問》

工場などでは異物混入を警戒して駆除してほしいという相談を受けるのですが、どうすればよいのでしょうか？

### 《回答》

顧客からの要望だと、何かしらの対応が必要ですが、現行の殺虫剤の散布では効果はあまり期待できません。どちらかと言えば、駆除よりも被害回避に重点を置くべきでしょう。つまり、窓や開口部、あるいは、物に付いて室内に迷入するのを防ぐということです。タカラダニは徘徊性ですから、開口部についてはこの時期だけ密封してしまうとか、耐候性粘着シートで侵入状況をモニタリングするなどが考えられるのではないのでしょうか。ま

た荷物についてはエアブラシやエアカーテンの導入などは有効でしょう。ただし、工場によって制約があるでしょうから、工場社員の理解と協力が必要です。しかしながら、窓辺の外側で徘徊している個体を静かに観察していると、外壁部分から窓枠のサッシを登ったり、サッシを越えて室内に侵入する個体は少ないように思います。

興味深い事例として、私の職場になっている昭和30年代と平成10年頃に建てられた隣り合う新旧2つのビルでの例があります。旧館は屋上の大部分がラバーコーティングされていて、新館はコンクリートがむき出しとなっています。毎年、新館屋上では多数のカベアナタカラダニが発生していますが、旧館ではまったく見られないのです。旧館のコーティングはだいぶ古く、埃や煤煙もたまっているのですが、未だに発生は見られません。こうした事例も対策のヒントになるかもしれません。